

”ろじろ”

日付 2017/05/28  
第二稿

作者名…仲村真廣

・登場人物表

主人公

彼女  
かなた

陽気なおじさん

富田  
とみた

お兄さん肌

困  
こまり

ノリノリ少女

うちのした  
家ノ下

捻くれた女性  
エックス

純粹な被害者  
チヨコ

19 歳。 本人は慎重派のつもりだが、そうでもない。人を殺し、その罪悪感から逃げるために集会に参加した。

36 歳。 明るく適当な性格。 家族を持っている。 しかし、勤めていた会社が突如倒産。そこから、典型的な転落人生が始まる。 酒、パチンコに暴力、借金までも負ってしまった。 家族を守り借金を返済するために集会に参加した。

23 歳。 しっかりしていて、多少几帳面。 付き合っている彼女がおり、その彼女は持病を患っている。 放置すれば命に関わるほどの病気であるがその治療費の高さから治療できないでいる。 治療費を得るために集会に参加した。

18 歳。 能天気に見えるが、心情は複雑。 元はお金持ちであったが、遺産相続の手違いで貧乏になってしまった。 下に五人兄弟がいる。 兄弟の生活費を得るために集会に参加した。

25 歳。 大人の落ち着きがある。 好きな男性に振られたばかりで、自身が彼のためにならないことを悟り、少しでも役に立てばと考えている。 その男に勝手に金を与えるために集会に参加した。

17 歳。 彼方に殺された少女。

タイトル・あらすじ

彼方は目覚めると何らかの集会に居た。楽しそうな面々のようだが、彼方には見覚えがなかった。それどころか、記憶がなかった。

## 1.

$$\begin{pmatrix} \text{F} \\ \bullet \\ \text{I} \end{pmatrix}$$

彼方、中央に立っている。

彼方  
「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、  
はあ。どうしよう、どうしようどうしよう、やちやつた、  
はあはあ、あ、あああああああああああああああああ  
あああああああああ！」

$$\begin{pmatrix} \text{F} \\ \bullet \\ \text{O} \end{pmatrix}$$

## 2.

彼方、寝ている。

富田と困、作業をしながら喋っている。

$$\left( \begin{array}{c} \text{F} \\ \bullet \\ \text{I} \end{array} \right)$$

「はっ」

問

「疲れてるのかな……」

「お、兄ちゃん起きたか！　ちよつと手伝ってくれ」

「？」

「あ、彼方君おはよう」

「お、おはよー……」

「今、鍋の準備をしてるんだ」

「な、鍋……？」

富田　—そうなんだよそうなんだよ。で、野菜切つてんだけど慣れないよねー、こういうの」

彼方 「はあ……」

富田 「だからさあ、兄ちゃんやってくれねーかなー？ って」

困 「富田さん、自分の仕事は自分でやってくださいよ」

富田 「困の兄ちゃんはキツイなー」

困 「そんなことないですよ」

富田 「……どう？ 兄ちゃん」

困 「富田さん」

富田 「ごめん、ごめんって、困の兄ちゃん」

困 「いやー、怒ってはないですけど……」

間

困 「あ、彼方君も何かやる？」

間

彼方 「あ、はい」

困 「大丈夫？」

彼方 「大丈夫……です」

困 「それならいいけど。あ、エックスさんにこれ渡しといてくれるかな？」

困、彼方にボールを渡す。

彼方 「え……エックス？ さん？」

困 「どうしたの？」

彼方 「あ、いや……その……」

富田 「ああ、エックスさんなら、家ノ下ちゃんと一緒に食糧庫にいるよ。その廊下通ったら行けるから。というか、ことその二部屋、後トイレぐらいしかないんだから。覚えなよ？」

彼方 「ああ、はい。分かりました」

彼方、はける。

富田 「それにしても、良かったな―」

困 「何がですか？」

富田 「いやね、自己紹介とか。この小屋に入る前って言ったらいいのかな？ まあまあ、なんかそのとき、暗かったというか、思い詰めてるというか。ま、そんな感じだったからや」

困 「そうですね……」

(F・O)

(F・I)

エックスと家ノ下、食材探している。

彼方、ボールを持って入ってくる。

「持ってきました―」

「あれ？ 彼方再起不能<sup>リタイア</sup>だったんじゃないの？」

「再起不能<sup>リタイア</sup>って？」

「オラオラってやつ」

「オラオラですか？」

「はいはい、家ノ下さんと喋ってないで、ボール渡す」

「あ、はい」

彼方、エックスにボールを渡す。

「ん、ありがとう」

エックス、ボールの中を洗う動作。

「どうする？ 一緒にここ漁る？」

「いや、その。つというか、これ男の仕事なんじゃ」

「エックスさんそういうの好きらしくて」

彼方 「へー、意外…」

エックス 「何？」

彼方 「なんでもないです…」

エックス 「それならよし、私はそのまま探ろうかな」

彼方 「あ、それはそうと、ここに出口ってないんですかね？」

間

家ノ下 「…はいはい冗談はいいから、行った行った。あ、そう  
だ。はいこれ持ってって」

家ノ下、彼方に鍋を渡す。

彼方 「ん？ ん？ 出口は？」

家ノ下 「はいはい、出口はあっちでーす」

彼方 「そこはさっき俺が入ってきたところだろ!？」

家ノ下 「とりあえず持つてく持つてく」

家ノ下、彼方を催促する。

彼方 「わかった！ 出るよ！ 危ないから危ないから！」

彼方、はける。

間

家ノ下 「ふう……」

エックス 「彼ってあんな感じだったっけ？」

家ノ下 「いやー、吹っ切れたんですかね？ 最初めちやくちや怖  
かったですもんねー」

エックス 「そうね」

家ノ下 「あ、そうだ！ エックスさんもやりました？」

エックス 「あったよ。そっちの段ボールに入ってる」

家ノ下 「やったー！ うんうん、やっぱり鍋にはもやしだよね！  
あ、豆苗があるとなお良しです！」

(F・O)

4.

模索

(F・I)

彼方、鍋を持って入ってくる。

彼方 「はあ……なんだこの状況。とりあえず整理しよう」

間

彼方 「えっと、最初の人達は、困さんと富田さん。食糧庫で会ったのはエックスさんと家ノ下さん……で、ここの人達は料理を作ってる……？ ……意味が分からないな……」

間

彼方 「出口も見当たらないし、変な事件に巻き込まれてる？」

間

彼方 「とにかく、記憶がないのはばれないようにしなきゃ。これが軽い記憶喪失ってやつなのかな？ ……はあ……よし」

彼方、はける。

(F・O)

5.

晚餐

(F・I)

富田と困、作業をしながら喋っている。

彼方、鍋を持って入ってくる。

富田 「お、戻ってきた、って鍋も持ってきてくれたのか」

彼方 「あ、はあ、まあ……」

困 「じゃあ、富田さんコンロお願いします」

富田 「困の兄ちゃん、年上を使うの慣れてきたよね？」



困 「いえいえ、僕はまだ作業が残っているだけですから」  
富田 「ほんとかなー」

困 富田、コンロの用意を始める。  
「あ、富田さん。包丁はちゃんと片付けた方がいいですよ」

富田 「わかったわかった、後でやるよ」

彼方 「えっと、俺は…」

困 「いいよ座ってて、僕ももう少しで終わるから」

彼方 「あ…はい」

富田 富田、鍋の準備を終える。

富田 「ほいほーい、こんな感じでいいか？」

困 「はい、ありがとうございます」

家ノ下 家ノ下とエックス、袋を持って入ってくる。

家ノ下 「皆の者！ 食材を持ってきたぞー！」

富田 「家ノ下ちゃんちようどいいなー」

エックス 「ん、富田さんはこれ。困君はそっち」

困 「ありがとうございます」

エックス エックスと家ノ下、富田と困に袋を渡す。

彼方 「え、何それ？」

困 「あ、彼方君には何がいいか訊いてなかったね」

彼方 「え、何それ重要なことですか？」

エックス 「と思つて用意しておいたわ」

家ノ下 「さすがエックスさん！ やりー」

彼方 「え、どういう？」

富田 「ほらほら、受け取んなって」

彼方 「え？ え？」

エックス 「ん」

彼方 「あ…はい」

彼方、エックスから袋を受け取る。

富田 「よし、じゃあ最後の晚餐を始めようか」

彼方 「え？ ささ、最後の、晚餐？」

富田、部屋の電気を消す。

(C・O)

彼方 「え、何！？ 暗いんだけど！ 暗いんだけど！」

家ノ下 「彼方うるさい！ あ、もしかして暗いの苦手なん？」

困 「寝るときとか大変そうだね」

彼方 「いや暗いのが特別苦手ってことじゃないんですよ！ でも急に真っ暗になると怖いじゃないですか!？」

エックス 「急につて、もうびくついちゃって」

富田 「男はこういうときにどつしり構えておくもんなんだぞ」

彼方 「いや！ そんなこと言われても！」

(C・I)

彼方 「ひゃっ」

富田 「じゃあ、どうする？ 待ってる間、縄跳びでもするか？」

彼方 「脈絡なさすぎません!？」

富田 「いや、袋に入ってたからさ」

家ノ下 「いーね、いーね。やりましょう！」

家ノ下、縄跳びを受け取り遊ぶ。

困 「ははは、若いね…僕には真似できないよ」

エックス 「何言ってるの？ 私より若いでしょうに」

困 「そうなんですけ……いえ、エックスさんの方が若く見えますよ……」

エックス 「ありがとう」

困 「あははは……」

間

彼方 「って、何だこれー！」

間

彼方 「縄跳びって何ですか!? 縄跳びって!? 何で縄跳び!? 数多の……そう! 遊び道具から、なんで縄跳び!? つてここにそんなものがあつたの!」

エックス 「ああ、食糧庫にあつたよ。他にも野球ボールやグローブ、サッカーボール、バレーボール、ラグビーボール」

彼方 「何故だ!? なんで全部スポーツ用具なんだ?」

家ノ下 「一応、トランプとかもあつたよ」

彼方 「うんうんうん、何でそれ持ってたこなかったの!? 何で縄跳びなの!」

富田 「まあまあ、兄ちゃん落ち着きなよ。ほら、そろそろ鍋に火が通つてと思うしさあ。ほら見てみなよ」

富田、鍋の蓋を取る。

(SE..なんかやばいもの)

富田、蓋を閉じる。

間

富田 「ほら……その……美味しそう……だろ?」

間

富田、鍋の蓋を取る。

(SE..なんかやばいもの)

富田、蓋を閉じる。

|      |                             |    |   |
|------|-----------------------------|----|---|
| 6.   |                             | 現実 |   |
| 彼方   | 「あの……俺。その…なんていうか……」         | 彼方 | 「そうか。あの真っ暗って闇鍋のせいかな」  |
| 間    |                             | 間  |   |
| 彼方   | 「その…記憶がないんです……そ、そう！ 記憶喪失的な」 | 彼方 | 「そっか…闇鍋か。闇鍋」  |
| 家ノ下  | 「じよ、ジョーク？」                  | 間  |   |
| 彼方   | 「いや、本気」                     | 彼方 | 「ってなんで闇鍋なんだ！ 闇鍋ってあれだよね！ 真っ暗にしてやるあれだよね！ さっきのあれだよね！ 俺が騒いでる間にやったあれだよね！ これって最後の晩餐なんだよね！ っていうか絶対に美味しいとは思えないよそれ！」 |
| 間    |                             | 富田 | 「どうどう、落ち着きなさい」  |
|      |                             | 彼方 | 「ただでさえこんな状況なのに…頭割れそうだな」   |
|      |                             | 間  |   |
| 困    | 「こんな状況……？」                  |    |   |
| 彼方   | 「あ、いや。その……」                 |    |   |
| エックス | 「どういう意味なの？ それ」              |    |   |
| 彼方   | 「それは」                       |    |   |
| 間    |                             |    |   |

富田 「そうだったの、ええ？ 兄ちゃんも大変だな」

エックス 「そうね」

彼方 「あのー、リアクション薄くないですか…」

困 「まー、こんな状況ならそういうのもあり得なくはないですしね」

彼方 「こんな状況？」

富田 「兄ちゃん。世の中には知らなくてもいいことだってあるんだぞ。さつ、鍋の続きでもしようか」

彼方 「いや、待ってくださいよ。そんなはぐらかし

エックス 「富田さんの言うことにも一理あると思うけど？」

彼方 「エックスさんまで…俺は記憶を取り戻したいんです！ 外にも出られないし！ 何か目的があるようにも見えない！ こんな絶対におかしいじゃないですか！」

間

家ノ下 「私は。私はちゃんと彼方に言った方がいいと思う。やっぱり、覚悟のいることだから。いいでしょ？」

彼方 「家ノ下……」

家ノ下 「今から言うことは、彼方。いえ、あんたにとって相当覚悟のいることだから、そのつもりで聴きなさい」

彼方 「覚悟って？」

エックス 「聴いたら分かる」

家ノ下 「私たちは……今から死ぬのよ」

彼方 「は？」

エックス 「正確には、三時間後、ね」

彼方 「三時間後？ ちょっと待ってくれよ、死ぬって誰が？」

家ノ下 「ここにいる全員」

彼方 「全員…？」

家ノ下 「全員」

彼方 「いやいや。いやいやいやいやいや。ちょっと待  
つてくれ。なんで死ななきゃいけないんだよ」

富田 「ほら、混乱しちゃったでしょ」

彼方 「説明してくださいよ！」

困 「そういうアルバイトなんだよ」

彼方 「は？」

エックス 「ほらいるでしょ？ 政治家とか有名人とか命狙われやす  
い人って。そういう人たちの身代わりに死ぬんだよ。ま、  
影武者ってとこかな」

彼方 「そのどこがアルバイトなんだよ!？」

困 「お金……僕らが身代わりになれば、お金が手に入るんだ  
よ。だから、アルバイト」

彼方 「待て待て、死んだら金なんて意味がないだろ？」

困 「ある」

彼方 「そんなわけないだろ！」

富田 「彼方君！ 俺には妻と子供がいる。でも、それ以上に借  
金があるんだ。俺が妻と子供の為に借金を返そうとするこ  
とは意味のないことか？」

彼方 「確かに、そう言われると、そうですね。やっぱりおか  
しいですよ！ だって死ぬんですよ!?! なら生きて頑張  
った方が子供たちも喜びますって」

エックス 「それができないからここにいてるんでしょう？」

彼方 「俺は死にたくない！ みんなだって、仕方なくここに  
いるはずだ！ だろ？」

間

彼方 「だったらさ、死ななくてもいい方法を考えようよ！」

間

彼方

「なあ？」

間

困

「三千万」

彼方

「…なに、その数字…」

困

「僕の彼女、神経分離症っていう病気なんだよ。その治療費。三千万。まあ、治療じゃなくて進行を遅らせるだけなんだけど…僕が生きたまま払るかな？」

彼方

「それは…」

困

「僕よりも頭が良くて、僕よりも成績が良くて、僕よりも物覚えが良くて、僕よりもみんなと仲良くて…何でもできたんだよ。彼女。でもそれにかかってからさ、少しずつ少しずつ、できないことが増えて…わかる？好きな人が人間じゃなくなっていくんじゃないかって想像しなきゃいけない僕の気持ちさ」

間

困

「でも、今なら間に合うんだ。口も聴けるし、体も足以外はそこまで問題ない。だから、僕は死ぬ。彼女なら僕よりうまくやっていける」

彼方

「それでもその彼女は君に生きてほしいって思うんじゃないのか？」

困

「何言ってるの、それは僕にも言えることだよ。僕は彼女に生きてほしいんだ。その両方が叶うことはない、なら。自分の願いを叶えるまでじゃないか」

彼方

「それって君のエゴだろ？」

困

「そう。だから何？」

間

彼方

「そんなの彼女が喜ばないんじゃないか？」

困

「だから、僕はさつき、自分の願いで彼女を助けるって言ったよね？」

問

彼方

家ノ下

彼方

家ノ下

彼方

彼方、家ノ下に暴力を振ろうとする。

富田、彼方を止める。

彼方

彼方、包丁を拾う。

$$\begin{pmatrix} C \\ \bullet \\ O \end{pmatrix}$$

彼方、富田↓家ノ下↓困↓エックスの順に殺害する。

7.

## 責任

$$\left( \begin{array}{c} \text{F} \\ \bullet \\ \text{I} \end{array} \right)$$

彼方、中央に立っている。

富田と困と家ノ下とエックス、倒れている。

彼方

はあ。どうしよう、どうしようどうしよう、やちやつた

チョコ、入ってくる。

チヨコ



「だ、誰だ！　どこから入ってきた！」

「うわあ、酷ーい。覚えてないの？」

「覚えてない！」

「じゃあ、いいや。それよりも、これ死んでるよー、君がやったんでしょ？　やーい、人殺しー」

「うるさい！　うるさい！」

間

「ねえ、記憶喪失って治ったの？」

「は？」

「いいから」

「まだ。だけど？　いや、どうしてお前がそれを知ってる？」

「それ、君が思い出したくないだけでしょ。それに、そのせいでこの四人は死んじやったんだよ？」

「それは…こいつらが俺を巻き込んで死ぬ気で

「ふふ…あつはつはつはつは、はーおかしい」

「な、何がおかしんだよ！」

「巻き込まれた。ですって」

「は？」

「君は自分から進んでこの集会に来たんだよ？　それを巻き込まれたって、あつはは」

「そんなはずない！　死にたい人間がいるわけない！」

「死にたい人間がいない？　こんなにいたのに？」

「違う！　あれは…きつと…違うんだ！」

「違うって？」

「だって…あいつらはお金欲しさで…それで

チヨコ 「まあ、あの四人が死にたかったかどうかは置いて。君は死にたくなかったんじゃないかな？」

彼方 「じゃあ！

チヨコ 「死ななきゃいけなかった。これなら、はい、辻褄が合いました」

彼方 「死ななきゃいけなかった……どうことだよ！ お前何か知ってんのか！」

チヨコ 「いいこと、一つ教えてあげる。罪悪感って人を殺せるんだよ？」

彼方 「罪悪感……？」

チヨコ 「これでも思い出せないかー。じゃあ大ヒント！ あるところに普通の少女が居ました。少女は部活が終わり、家に帰ろうと電車に乗りました、そこにはいつも見る男がいました。きつと帰宅時間が同じなのだろう、と気にしませんでした。少女が電車を降りると、その男も降ります。いつもはその男は電車に残っているのですが、まあ、偶然用事があるのだろう、とこれも気にしません。とぼとぼと家に向かっていると先程の男が凄い形相で腕を掴んでくるではありませんか。怖くなった少女は大声を出そうと息を吸う、しかし男はポケットに隠してあった刃物を突き付けます。それでも少女が暴れると、刃物が首を

彼方 「ああああああああ！ お前。生きていたのか？」

チヨコ 「ううん、残念なことに死んでるよ。君に殺されて。でも、思い出したみたいだね」

間

チヨコ 「何で私を？」

彼方 「そ、それは」

間



彼方 「俺は。俺は」

彼方、縄跳びを手にする。

(F・O)

8. 贖罪

(F・I)

彼方、首に縄跳びを絡ませて中央に倒れている。

「なるほどー、自殺かー。そんな誰も得しないことで罪滅ぼしだと思ってる辺りが凄く腹立たしいけど。いいよ。許してあげる。私は寛大だから」

チョコ、彼方を眺める。

「でも、自分のやつちやったこと。もう少ししっかり見た方がいいんじゃない？ ね？」

間

「さてと、私も行きますか。それじゃ罪滅ぼし頑張ってねー。後、四回。ね」

(F・O)

おしまい。